五感を潤す湖畔の宿で一期一会の心に癒される。
琵琶湖を一望する解放感抜群の展望風呂「三上の湯」
凜とした雰囲気の中、静寂のロビーから望む旅情漂う中庭に心が和む
ワンランク上の空間「京近江」に用意された、風光明媚な露天風呂付客室
おごと温泉最大の規模を誇る宿。観光の拠点として利用したい
湖面を渡る風、心に響く情景。ここは上質な大人の時が流れる
地元の旬食材と厳選された味覚の数々、創意工夫を凝らした会席料理の一例
会議室「塩津」
宴会場「京友禅」
びわ湖畔　おごと温泉
琵琶湖グランドホテル
Tel077-579-2111（予約専用）077-579-0111
琵琶湖グランドホテル別館　京近江
Tel077-577-2211（予約専用）077-577-2000
〒520-0101 滋賀県大津市雄琴6-5-1　http://www.biwakogh.co.jp

ここにしかない富士がある。　富士山を望む河口湖畔の宿 秀峰閣湖月
秀峰閣湖月 SHUHOUKAKU KOGETSU
〒401-0304 山梨県南都留郡富士河口湖町河口2313
TEL. 0555-76-8888　FAX. 0555-76-8940
http://www.kogetu.com/

進化する金太郎温泉
2010年から客室をはじめ、館内の様々な施設をリニューアルしております。
お客様にとってより心地の良い空間をめざして金太郎温泉はこれからも進化し続けます。
日本の名湯　北陸 富山　金太郎温泉　光風閣
TEL 0765-24-1220
〒937-0013 富山県魚津市天神野新6000
金太郎温泉　富山　検索　https://www.kintarouonsen.co.jp
北陸新幹線 黒部宇奈月温泉駅 シャトルバスで10分
日帰り温泉 カルナの館
TEL 0765-24-1221

ヒューリックホテルマネジメント株式会社
HULIC
THE GATE HOTEL　VIEW HOTELS　Tokyo Bay Maihama Hotel

地域観光

九州観光ビジネスプランコンテスト
最優秀賞は中村学園大チームに
九観機構主催

最優秀賞に選ばれた中村学園大の学生（左は唐池会長）

学生が九州の観光活性化に向けたビジネスプランを競い合う「学生対抗九州観光ビジネスプランコンテスト2024」の本選が12月7日、福岡市の電気ビルみらいホールで開催された。九州観光機構（唐池恒二会長）が主催する同コンテストは、国内外から九州へのリピーター増加を目指すビジネスアイデアを競うもので、今年で3回目。

冒頭あいさつした唐池会長は、「ビジネスコンテストは九州だけでなく、関東、関西など全国の大学が参加。来年からは九州観光ビジネスコンテストから全国観光ビジネスコンテストに改名を検討している」と述べ、コンテストのさらなる発展に意欲を示した。

今回は全国から67チームのエントリー（うち、24%は九州外）があり、厳正な審査の結果、10チームが本選に進出。学生たちは、九州の地域資源の魅力を最大限に引き出し、持続可能な観光を創出するための革新的なプランを発表した。

最優秀賞に輝いたのは、中村学園大学の「Let，s ラーケーション！～目で見て、触れて、考える～in九州」チーム。同チームは、学習と休暇を組み合わせた「ラーケーション」を九州で推進するためのシステム構築を提案。同機構の唐池会長もこのアイデアの実現に強い関心を示した。

その他の入賞チームも、それぞれ特徴的なプランを発表。福岡大の「地域まるっと！エデュツーリズム」は、地方都市の活性化に貢献する教育旅行を提案し、九州産業大の「オタクの夢を形に！共創ゲストハウス大作戦！」は、アニメコンテンツを活用した観光客誘致策が評価された。

今回のコンテストでは、少子高齢化、地域活性化、環境問題など、社会課題の解決につながるアイデアも多く見られた。

例えば、大東文化大は、過疎化が進行する地域のために九州の食文化を軸に、地元住民と旅行者をつなぐシェアダイニングを提案。中村学園大は、離島が多い九州の魅力を再発見できる親子向けの体験型旅行を提案するなど、九州の地域特性を生かしたユニークなプランが飛び出した。

最優秀賞には賞状と、賞金またはギフト20万円分、協賛社からの副賞が贈られた。

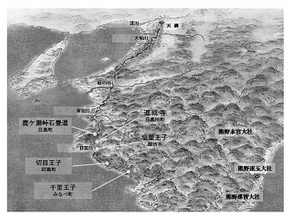
表彰結果は以下の通り。

最優秀賞＝中村学園大（Let，s ラーケーション！～目で見て、触れて、考える～in九州）▽優秀賞＝九州産業大（KSU ツーリズムlovers）▽第3位＝福岡大（ふるらぼ）▽審査員特別賞＝大東文化大（飛んで福岡）、中村学園大（浅岡ゼミ）

【後田大輔】

「熊野古道 紀伊路」の価値発信
ユニストHDと日高地方7市町
協定結び沿線地域活性化

和歌山県・日高地方の7市町と日高広域観光振興協議会はこのほど、熊野古道の紀伊路から中辺路に続く熊野参詣道を大阪から15日間かけて完歩する「紀伊路SCAPE事業」を計画するユニスト・ホールディングス（ユニストHD）と連携し、紀伊路の観光価値を高めるための連携協定を締結すると発表した。空き家の活用や地元食材を使用した食事の提供、インフラ整備などに官民が連携して取り組み、沿線地域の活性化を目指す。



熊野古道の紀伊路は、熊野詣における参詣道の一つ。畿内と熊野を結ぶメインルートとして古くから知られている。

不動産開発や熊野古道での宿泊施設運営などを展開するユニストHDは、大阪から和歌山をつなぐ紀伊路の歴史的・文化的価値を生かした新たな観光商品の提案・開発の一環として、紀伊路から中辺路に続く熊野参詣道を15日間で完歩する「紀伊路SCAPE事業」を計画している。昔のように畿内から徒歩で参詣する行為の大切さを現代に伝えるとともに、険しい峠を越え紀州の明るい海を見渡せる紀伊路を新たな観光資源とすることで、沿線地域の活性化を目指している。

今回の連携では、日高地方の7自治体（御坊市、美浜町、日高町、由良町、みなべ町、日高川町、印南町）が参画。

具体的な連携項目は、①地元産品を活用した食事メニューや土産品の開発（宿泊場所での宿飯、出発時の弁当、疲れをいやす甘味物、特産品を使用した土産品など）②空き家を活用した宿泊施設の確保（日高、切目、岩代エリアでの古民家リノベーション）③紀伊路の整備（道普請活動、ベンチやトイレ、休憩所の整備、街並みの景観保全）④日高地域でのイベントのPR（日高管内で実施されるイベントへの協賛、紀伊路の認知度向上への貢献）―の四つ。

事業の対象区間は、紀伊路最大の難所といわれる鹿ヶ瀬峠から田辺市街に入るまでの区間で、道中には県内最古の寺院「道成寺」や美人王子として知られる「塩屋王子」、枕草子や伊勢物語でも登場する「千里の浜」などの観光スポットが点在している。15日間の参詣のうち、同地方の滞在は5～7泊目にあたる。

1月10日の午後3時からは、日高振興局別館の大会議室で連携協定の調印式を執り行う。7市町の町長と日高広域観光振興協議会の金﨑昭仁会長、ユニストHDの今村亙忠代表取締役が出席する。

鹿ヶ瀬峠から田辺に入るまでの区間が連携の対象区間となる

地域創生と観光ビジネス
第67回

2025年は教育旅行に変革の波　日本の未来を支える子らに投資を

2025年は教育旅行に変革の波が訪れそうだ。

東京・港区で区立中学校の修学旅行先を、これまでの京都・奈良からシンガポールに変えたというニュースは、社会に大きな衝撃を与えた。インバウンドの増加でオーバーツーリズムが深刻な京都では、修学旅行生が混雑した市バスに乗れず、班行動に支障が生じるなど事態は深刻だ。なかには渋滞で貸し切りバスが立ち往生したため、新幹線に乗り遅れそうになったケースもあったという。宿泊施設は全国的に価格が高騰しているから、積立金からなる修学旅行費用も見直しを迫られている。

かつて港区立の中学校に息子たちを通わせた身としては、海外修学旅行の導入をうらやましいとも感じた一方で、格差の助長も気になった。教育や地域の格差は加速度的に広がるばかりの今日にあって、真剣に修学旅行について議論するときを迎えたようだ。

例えば親の判断で、私学をあえて選ばない裕福な家庭もある。息子たちが港区立の小中学校に在籍していたころは、全国にさきがけてモンスターペアレント対策に、区が専任の弁護士を置いたことが話題になった。親もいろいろだ。また、大使館や企業が多い同区では外国パスポートを保有する子どもの数も多い。こうした特異性のなか、海外修学旅行を取り扱う旅行会社は、かなり神経を使うことだろう。

わが国のパスポートの保有率は6人に1人と、コロナ禍前から半減した。日本の将来を背負って立つ子供たちに、今こそ政府が主導して修学旅行の補助を手厚くすべきだ。中学受験や私学偏重は今に始まったことではない。だが、子供たちの体験格差は国力の低下にもつながりかねない。

そのようなことを考えながら公益財団法人日本修学旅行協会の竹内秀一理事長のもとを訪ねた。近ごろの修学旅行の傾向や実態など、取材内容は多岐にわたった。総合的な学習における探究学習の導入で、修学旅行のプログラム構成には、これまで以上に工夫が求められる。ときには息抜きできるようなアクティビティも織り交ぜてやらないと、生徒たちの集中力も落ちる、とコツを語られた。

インタビューのなかで強く印象に残ったのが、平和学習への造詣の深さだった。日本被団協がノーベル平和賞を受賞して、その重要性は増している。世界からも注目される広島・長崎をはじめ特攻隊の知覧やひめゆり学徒隊の沖縄など、修学旅行における平和学習の意義は大きい。

「体験から得られる学びは、生徒たちの成長に欠かすことができない」と竹内氏は語った。長年、教育の現場で培われた高い見識と豊富な経験に裏打ちされた重みがあるコメントだ。

コロナ禍を経て多くの旅行会社はマンパワー不足に陥った。そのため入札辞退も散見されるらしい。海外ランドオペレーターは奪い合いの様相を呈しており、結局は価格に跳ね返って保護者の負担は増すばかりだ。

子供が多い時代は修学旅行もマスツーリズムだった。だが少子化の今こそ、官民あげて変革に注力すべきだ。収益性だけで事業を縮小するのではなく、あえて投資をして変化を促す。

教育旅行は筆者が今年、もっとも注力したいテーマでもある。

（淑徳大学　学長特別補佐・経営学部学部長・教授　千葉千枝子）

＝隔週掲載